

## パレスチナ医療支援事業（ガザ地区） ～リモート支援～

救急部看護師 藤原 真由

派遣期間：2021年4月1日～2022年3月31日

派遣国：イスラエル領内パレスチナ自治区ガザ地区へ日本からのリモート支援

私は、2021年3月末までリモート支援要員として当院での臨床業務と兼任し活動していました。当事業は、2019年10月から現地へ医師・看護師を派遣し、ガザ地区内にあるパレスチナ赤新月社が運営するアル・クッズ病院への医療支援事業として開始されました。しかし、2020年1月、COVID 19の流行により、現地に派遣されていた要員は全員帰国となり、次に日赤要員が派遣されるまでは、現地スタッフのみで事業を継続しなければならない、という状況になりました。現地派遣が可能となるまでのBCPとしてWeb会議システムを利用して遠隔で支援を行うことが決定され、私は現地から帰国後、リモート支援要員に任命されました。現地での活動やリモート支援開始時の報告は前回の報告書である



アル・クッズ病院

[https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/upload/006\\_145.pdf](https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/upload/006_145.pdf) と  
[https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/upload/006\\_148%20%281%29.pdf](https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/upload/006_148%20%281%29.pdf) もご参照ください。

当活動では、毎週木曜日の午後半日をリモート支援の時間として勤務調整していただき、臨床業務との両立を行っていました。現地には事業アシスタント1名、事業を担当する看護師が12名ほどおり、私は主にアシスタントと連絡を取りながら現地で使用する看護プロトコルの作成支援とそのプロトコルを看護師全員へ周知させるためのワークショップ準備・運営を担っていました。現地とは時差の影響がある



現地看護師との会議

上に、現地の COVID 19 対応に追われ、現地スタッフが十分に事業へ参加できないこともありましたが、当事業は現地の人たちが自分たちでプロトコル作成や勉強会の運営ができるようになることで、看護部門の継続教育機能を活性化させることが目標の一つでも

あつため、アシスタントを通して現場の状況を判断しながら、現地看護師からのプロトコル草案の提出を待ったり、促したりを調整していました。実際に自分の目で現場が見えないので、そのさじ加減に苦労しながらも、最終的には看護プロトコル5個完成、リモートでのワークショップ1回開催を達成しました。これは、勤務調整などご協力いただいた病院の皆様、現場で臨床業務や COVID 19 対応がありながらも事業に協力してくださった現地看護師の皆様のおかげだと思っております。また、この結果は、実際に要員が現地に滞在せずに、現地の活動を支援するという新しい形でできることと課題の明確化への一助となったと考えています。



点滴ワークショップの様子



出来上がったプロトコル



遠隔でのワークショップ参加

徐々に現地派遣も再開されていますが、COVID 19 の影響がなくなったわけではありません。その時々状況に応じた支援の方法として、リモート支援の形の構築に貢献できたことを嬉しく思っております。当事業で関わった皆様の厚意に感謝申し上げます。



現地のみんなど



パレスチナ赤、日赤の皆様